『日本アジア研究』第5号（2008年3月）

全漢志伝・両漢開国中興伝誌・漢書故事 輯校本（試行本）並びに研究序説

大塚　秀高*

以下に掲げる輯校本（試行本）は，『全漢志伝』、『両漢開国中興伝誌』、『漢書故事』それぞれの本文の，『両漢開国中興伝誌』巻5に対応する部分を比較対照したものである。なお，前稿「前漢書平話続集・全漢志伝・両漢開国中興伝誌輯校本（試行本）並びに研究」にならい，これまでの研究史を明らかにすべく，簡単な研究序説を附しておいた。凡例は今回改めて附さなかったが，すべて前稿にならっている。本来前稿を襲い，『前漢書平話続集』の巻中、下とこれに対応する『全漢志伝』、『両漢開国中興伝誌』の三者を対象とする輯校本を発表する予定で原稿も完成していたが，『漢書故事』が新たな資料として発見され，それをめぐって研究が進展をみせたため，本稿にさしかえることにした。比較の結果は今後別稿で発表するつもりでいるが，現在までのところ，『漢書故事』は『全漢志伝』、『両漢開国中興伝誌』刊行以降に，この両者を折衷しつつ作成されたものではないかとの見通しを持っている。

キーワード：『全漢志伝』，『両漢開国中興伝誌』，『漢書故事』，輯校本

一　研究の歴史(一)——発見の時代

近年，漢代を対象とする歴史物語あるいは歴史小説の研究が日中両国で盛り上がりを見せている。本研究もそのひとつというわけだが，それらの研究のなかにはお粗末なものも見られる。その原因のひとつに，そうした研究がこれまで積み上げられてきた研究成果を十分に踏まえていない点が挙げられる。そこで，僭越のきらいなしとしないが，まずは漢代を対象とする歴史物語、歴史小説に係わる研究の経緯を簡潔に振り返ってみたい。

漢代を対象とする歴史物語の現存最古のものは『前漢書平話続集』である。『前漢書平話続集』は正式な書名を『新刊全相平話前漢書続集』といい，つとに日本の内閣文庫で発見された。元の至治年間に福建・建安の虞氏によって刊行されたとされる歴史物語シリーズ全相平話のひとつで，全三巻上図下文の形式で刊行された。封面下部に記される別題の「呂后斬韓信」をその主たる内容とする。五種現存する全相平話のうち，漢代を対象とするものはこれひとつだが，「続集」とあることにより，これ以前の時代を対象とする作品の存在が推知され，「正集」と仮称された。なお，全相平話に関する研究はあまたあるが，本稿の趣旨からは離れるので，ここではそれらの紹介は割愛する。

その後，『前漢書平話続集』ならびに「正集」の後継とみなせる作品が名古屋の蓬左文庫に蔵されることが，長澤規矩也によって明らかにされた[1]。ひとつが万暦十六年の叙を冠する『京本通俗演義按鑑全漢志伝（『全漢志伝』は内

---

* おおつか・ひでたか，埼玉大学教養学部教授，中国文学

[1] 長澤規矩也「日本現存戯曲小説類目録」（原載『文字同盟』7，1927年。『長澤規矩也著作集』第五巻『シナ戯曲小説の研究』所収，汲古書院，1985年）。

容の異なる複数の版本が現存するので，以下ではこれを蓬左本『全漢志伝』と呼ぶ)』西漢六巻東漢六巻であり，いまひとつが万暦三十三年の蓮牌木記を有する『京板全像按鑑音釈両漢開国中興伝誌（以下『両漢開国中興伝誌』と呼ぶ）』六巻であった。ともに，全相平話と同様の，福建の書肆から刊行された上図下文本であった。「全漢」あるいは「両漢」を銘打つように，この二作品とも前漢のみを対象としたものではなかった。このことと，全相平話に『至治新刊全相平話三国志』が含まれていたこととにより，後漢時期を対象とする全相平話の存在が改めて注目されることとなった（仮にこれを「後漢書平話」と呼んでおく）。そこで問題となるのが，蓬左本『全漢志伝』、『両漢開国中興伝誌』と，これに二百五十年あまり先行する全相平話（『前漢書平話続集』ならびに「正集」，さらには「後漢書平話」）との具体的な関係である。

孫楷第によれば，蓬左本『全漢志伝』と『両漢開国中興伝誌』の関係を，長澤は後者の方が詳しいとしたらしい[2]。だが，『長澤規矩也著作集』にこの説の原拠となる文章はみあたらない。孫楷第が 1930 年に実施した東京での中国通俗小説の調査に同道したおり[3]に，長澤が口頭で述べたものであろうか。孫楷第はおそらくこの長澤説には半信半疑だったに相違ない。だが，孫楷第が両者を目睹調査する機会はついにめぐってこなかった[4]。

そもそも，西漢六巻東漢六巻の蓬左本『全漢志伝』と両漢を通じて六巻の『両漢開国中興伝誌』なら，当然蓬左本『全漢志伝』の分量が多くてしかるべきであろう。引用から判断する限り，孫楷第もそこに疑問を覚えたようだ。そこで，孫楷第になり替わってその疑念を晴らすとともに，注意すべき点を新たに指摘しておくことにしたい。

まず指摘すべきは，蓬左本『全漢志伝』には『両漢開国中興伝誌』が対象としない時代を語る部分が大量に存在しているという点である。これこそが，蓬左本『全漢志伝』の西漢六巻東漢六巻と『両漢開国中興伝誌』の両漢六巻の相違の来たすゆえんのところであった。そもそも，『両漢開国中興伝誌』は，開国と中興の部分のみを語るものであって，漢代全体をカバーするものではなか

---

[2] 孫楷第『中国通俗小説書目』（中国大辞典編纂処国立北平図書館，1932 年）に「按：日本長澤規矩也氏云：此本（『両漢開国中興伝誌』）較万歴十六年刊本（蓬左本『全漢志伝』）為詳」と見える。この記述は『中国通俗小説書目』のその後の版においても，歴が暦に変わった以外変わらない。なお，括弧内は筆者により補ったものである。

[3] この間の事情については，長澤規矩也「最近約十年間に我国で発見された支那戯曲小説研究の資料」（『安井先生頌寿記念書誌学論考』所収，自家版，1937 年。『長澤規矩也著作集』第一巻『書誌学論考』所収，汲古書院，1982 年）に見える。

[4] 譚正璧、譚尋『古本稀見小説匯考』（浙江文芸出版社，1984 年）の「両漢演義」の項は，蓬左本『全漢志伝』と『両漢開国中興伝誌』を長澤説によって紹介し，この二作品につき「孫楷第亦未見原書，亦未見他家著録，故不悉其内容」とする。なお，譚正璧、譚尋のこの書は，その叙論によれば，日本所蔵本への言及に限られていた 1945 年出版の譚正璧『中国佚本小説述考』を増補したものであるといい，譚正璧自身の旧稿「日本所蔵中国佚本章回小説述考（上）」（『真知学報』3-2，1943 年）さらには譚仲玉名義の「日本所蔵中国佚本伝奇小説述考」（『東方文化（上海）』1-1･3，1942 年）とも関係がありそうだが，三者いずれも未見につき，ここではその可能性の指摘のみに留める。

った。蓬左本『全漢志伝』の西漢の巻四後半と巻五、六，東漢の巻三～六に相当する部分は『両漢開国中興伝誌』には存在しないのである。

次に，残る両者がともに対象とする時代にあっても，単純な両者の字数の比較はさして意味を持たないことを指摘しておきたい。この部分，小松謙ならびに氏岡真士によれば[5]，確かに『両漢開国中興伝誌』の分量が蓬左本『全漢志伝』のそれをやや上回るようである。とはいえ，この部分にもおそらく蓬左本『全漢志伝』で削除ないしは挿増された部分が存在するから，比較は内容に立ち入ったものでなければ意味をもたないのである。

以上のごとき留保をするなら，蓬左本『全漢志伝』と『両漢開国中興伝誌』の対応する部分の繁簡をめぐる議論は，長澤説とそれを数字で実証した小松、氏岡説で不都合はない。ところが，今年，長澤説以来の見方をまとめて否定しようという研究が発表された。繆小雲の「《全漢志伝》新探」[6]である。だが，この「《全漢志伝》新探」，結論を先に言えば，誠にお粗末な内容のものであった。日本の先行研究はおろか，中国のそれも参照していないうえ，注の書き方もまともでないのだからあきれる。本文ならびに注により繆小雲が認知していると知れるこの分野の論著は，孫楷第の『中国通俗小説書目』、『古本小説集成』所収の影印本[7]（とその解題）、趙景深の「《前漢書平話続集》与《西漢演義》」[8]、「九十年代初欧陽健先生著《両漢系列小説》一書」、『中国古代小説総目（白話巻）』[9]と，彼が「最新研究」とみなす台湾・李宜涯の「元明建陽両漢講史小説比較」[10]にすぎない。

---

[5] 小松謙の「『全漢志伝』『両漢開国中興伝誌』の西漢部分と『西漢演義』――平話に密着した歴史小説とその展開――」（『中国歴史小説研究』第二章，汲古書院，2001 年。原題は「両漢をめぐる講史小説の系統について――劉秀伝説考補論――」，『未名』10，1992 年）で，小松は「同一部分を取り上げれば，場合により繁簡の差はあるものの，一般に『伝誌』の方が詳しいのである」とし，「例えば」として「先述の通り内容的にほぼ一致している『志伝』の巻一」と「『伝誌』の該当部分」を比較して，「単純計算すれば，八千四百七十字に対して一万三千四百九字と，ほぼ五割増しになる」とし，氏岡真士は「『漢書故事大全』について」（『ヨーロッパ現存中国学資料の研究』所収，平成 16 年度～平成 18 年度科学研究費補助金（基盤研究(B)）研究成果報告書，2007 年）で，「この計算には誤植がある」として，「西漢部分の『志伝』巻一は 37.5 葉だから 1 万 1550 字相当である。しかし『伝誌』が『志伝』の約 1.5 割増しと，多いことに変わりは無い」とする。筆者は二人の労を多とするものであるが，数字はあくまで目安にすぎず，数字が一人歩きすべきではないと考える。前稿（「前漢書平話続集・全漢志伝・両漢開国中興伝誌輯校本（試行本）並びに研究」，『埼玉大学大学院文化科学研究科博士後期課程紀要 日本アジア研究』4，2007 年）や本稿で筆者がおこなった輯校本作成の試みは，その具体的な意思の発露である。

[6] 『明清小説研究』2007-3，2007 年。

[7] 『古本小説集成』は 1991 年に上海古籍出版社から刊行された。なお，両者の影印本としては，1991 年に中華書局が出版した『古本小説叢刊』所収本も存在する。

[8] 『中国小説叢考』所収，斉魯書社，1980 年。文末に 1943 年とあり，内容的にも『両漢開国中興伝誌』や蓬左本『全漢志伝』の存在を知らない時点で書かれたものと判断されるから，この年に書かれ発表の機会を失った旧稿であろう。したがって，以下ではこれに言及しない。

[9] 山西教育出版社，2004 年。

[10] 『淡江人文社会学刊』23，2005 年。なお，繆小雲の注には発表年の記載がない。

繆小雲は，欧陽健及びそれ以後の中国の研究状況を「“《两汉开国中兴志传》比《全汉志传》内容为详，实由《全汉志传》增补而成。”此后国内学术界关于《全汉志传》并无新见」と総括した後，李宜涯説を「厘清彼此间继承关系及演变过程，推翻长泽规矩也、大塚秀高、欧阳健等先生“《两汉开国中兴志传》较余氏克勤斋《全汉志传》为详”的传统看法」と紹介し，李宜涯の得た「比较可靠的结论」として，「前汉书续集为《两汉开国中兴志传》及熊大木撰《全汉志传》的祖本，而《两汉开国中兴志传》及熊大木撰《全汉志传》则是兄弟关系」を引く。

ここで要約紹介される欧陽健説は，『古本小説集成』所収の影印本が刊行される以前に，先行して日本で発表されている橋本堯の「韓信の失脚——全相続前漢書平話から西漢通俗演義まで——」[11]や筆者の「講史章回小説の出版と改変——『列国志』をめぐって——」[12] を見ずに書かれたものであるからそもそも論ずるにたりないものであるが（結論も当然ながら誤っている），それを唯一の関連の文章として特筆大書し，改めて先行論文の有無を調べなかった繆小雲にも非がないとはいえまい。まして，自国の先学の労作さえ見ていないとあれば，お粗末としかいいようがない。その労作とは王古魯の『王古魯日本訪書記』[13]のことである。蓬左本『全漢志伝』と『両漢開国中興伝誌』に関する記述はその中に見える。

王古魯は，戦前に外国人教師として東京大学に招聘されたが，その間に，豊田穣などを帯同して各地を回り[14]，中国に逸した戯曲、小説の善本を精力的に写真撮影したことで知られ，そのうち，日光輪王寺所蔵の『水滸志伝評林』は戦後に影印本として中国で出版された[15]。王古魯自らがこうした訪書の経緯をまとめて記したものが「稗海一勺録」である。「稗海一勺録」は複数回活字化され[16]，全冊写真撮影したとされる『両漢開国中興伝誌』に対する王古魯の見

---

[11]『日本中国学会報』22，1970 年。

[12]『中国古典小説研究動態』3，1989 年。

[13] 海峡文芸出版社，1986 年。「出版説明」によれば，本書成立の経緯は「王古魯在日本从事文学生涯时，到东京的一些图书馆中翻阅了大量的中国古小说后编撰而成的」とされ、十五篇の項目別の文章からなる。ただし，論述の対象は東京の「一些图书馆」所蔵本のみにとどまらない。

[14]「日光訪書記」（『風雨談』9，1944 年）は，王古魯が日光輪王寺を訪問し，慈眼堂に蔵される天海僧正の蔵書を調査したおりの記録であるが，この時王古魯は豊田穣を帯同しており，豊田はその際の記録を「明刊四十巻本拍案驚奇及び水滸志伝評林完本の出現」（『斯文』23-6，1941 年）として発表している。

[15]『京本増補校正全像忠義水滸志伝評林』（文学古籍刊行社，1956 年）。なお，この影印本には『古本小説集成』、『古本小説叢刊』所収本のほか，2006 年 8 月の「羅貫中与『三国演義』『水滸伝』国際学術研討会」開催のおり，開催地山東省東平県人民政府が原装により再刊した綫装本がある。

[16]「稗海一勺録」は，解放前に南京の「報刊」に発表されたが（おそらく「攝取日本所蔵中国旧刻小説書影経過志略」（『中日文化』1-5，1941 年）を指そう），それが広く知られるようになったのは，『初刻拍案驚奇』（上海・古典文学出版社，1957 年）の附録三として収められてからであろう。『初刻拍案驚奇』は豊田とともに日光で「発見」した海内の孤本である。なお，「稗海一勺録」は 1982 年上海古籍出版社出版の『拍案驚奇』にも簡体字版が収められている。以下の引用は古典文学出版社版によった。

解，「內容與流行本東西漢不同，其系統承受元槧平話前漢書續集一脈」は，つとに斯界に公表されていたが，訪書記録そのものが公開されることはなかった。『王古魯日本訪書記』は，その訪書記録のうち歴史物語、歴史小説に関わる部分を，王古魯自身が生前に項目別に整理しておいたものとみられる。

『王古魯日本訪書記』の〔十一〕前漢書続集，〔十二〕京板全像按鑑音釈両漢開国中興伝誌，〔十三〕〔附〕全漢志伝のうち，〔十一〕前漢書続集で王古魯は注目すべき指摘をしている。「日本蓬左文庫所藏《两汉中兴开国(ママ)传志》，其中有关西汉部分与此书所叙大同小异，占全书六卷中的六分之一强(即卷三末尾及卷四一卷)，与坊本的东西汉大不相同，可以说它的渊源是从元平话来的。……同时还可以从卷五卷六叙的《光武灭寇兴东汉》事情看来，虞氏所刊平话之中，还应该有《后汉书》平话，那样才能接下面的《三国志》平话的」がそれである。また〔十三〕〔附〕全漢志伝では「当时选择拍摄全书时，因为觉得两汉中兴开国(ママ)志传接近元人平话，所以取彼舍此，只摄了书影」と，『両漢開国中興伝誌』を蓬左本『全漢志伝』に比し元人平話に近い存在とする見方を披露していた。これは橋本と同じ見解をつとに有していたことを示すもので，後述する書誌学的な指摘の存在とあわせ，その公表が遅れたことが惜しまれてならない。なお，王古魯の蓬左本『全漢志伝』に関する細かい書誌学的な指摘については後述する[17]。

二　研究の歴史(二)——解釈の時代の到来

『王古魯日本訪書記』刊行以降，とりわけ『古本小説叢刊』、『古本小説集成』所収の影印本により『両漢開国中興伝誌』と蓬左本『全漢志伝』の比較が可能になって以降，中国の一般の研究者にも解釈の時代に入る条件が整ったわけだが，成果はすぐには発表されず，発見の時代の状況を引きずるものが少なくなかった[18]。ちなみに日本の解釈の時代は橋本に始まり，筆者をへて小松、氏岡にいたるのだが，本稿の目的が中国方面における研究の歴史を概括することにあること，橋本や小松の業績については別稿で紹介している[19]ため，ここでは論じない。

閑話休題。発見と解釈の時代に跨る中国の研究者に程毅中がいる。程毅中はその『宋元話本』[20]の第二章講史で，「有一些讲史话本的残文，见于现存话本里的插话」として，『五代史平話・唐史』に見える王陵の故事を「大概引自已经失传的《前汉书平话》正集」と，馮道が引用する馮夷の故事を「应该就是《后汉书》平话的故事」と断じた。筆者も後にその驥尾に附し，既述の「講史章回小説の出版と改変——『列国志』をめぐって——」の中で，『両漢開国中興伝誌』や蓬左本『全漢志伝』から，「前漢書正集」と「平話後漢書」の痕跡を一

---

[17] 薛亮『明清稀見小説匯考』（社会科学文献出版社，1999 年）の「両漢開国中興伝誌」、「全漢志伝」にも同様な指摘がある。

[18] 欧陽健『歴史小説史』（浙江古籍出版社，2003 年）、斉裕焜『中国歴史小説通史』（江蘇教育出版社，2000 年）などが挙げられる。

[19] 筆者の前掲注 12 の論文ならびに「小松謙氏の『中国歴史小説研究』を読んで」（『中国古典小説研究』6，2001 年）がそれ。

[20] 『宋元話本』は 1964 年に中華書局から初版が出版されているが，筆者未見につき，以下の引用はこれに「只是作了一些小的修改」したとされる 1980 年中華書局再版本によった。

箇所ずつ指摘している。

程毅中はその後もこの方面の研究を継続しており，2004 年に北京の西山で開催された「小説文献与小説史国際研討会」で「従《前漢書平話》到《東西漢演義》——略論明代通俗小説発展的累積過程」を発表し，後日それを自身の『明代小説叢稿』[21]に収めた。程毅中によれば，『両漢開国中興伝誌』と蓬左本『全漢志伝』の関係は次のようになる。

> 《两汉开国中兴传志》里许多荒诞离奇的情节，多与平话相同。……这段情节完全取自平话。到《全汉志传》里就删去了。……有人认为《两汉开国中兴传志》是由熊大木编次的《全汉志传》增补而成，其实未必如此。相反的，很可能《全汉志传》倒是根据《两汉开国中兴传志》增改而来的，至少后者直接从《前汉书平话》承袭下来的较早的改本，只是现存的刻本晚于《全汉志传》而已。……由此可以推想第十九回《楚王独奔乌江自刎》以前楚汉相争的故事，应即《前汉书平话》正集的内容。元刻本平话虽然不存，但基本情节可以在《两汉开国中兴传志》里得知梗概。

ただし，これと同じ結論は 30 年以前に橋本が出している。それゆえ上述の研討会では失礼を省みず直接ご本人にそのことを申し上げた。しかるに，繆小雲はこの程毅中の論文にも言及しないのである。なお，程毅中は北京の国家図書館で定期的に開催された公開講座の講演筆記「明代小説的盗版与偽托」[22]においても同様の内容を語っている。

ひるがえって，繆小雲が李宜涯説を「厘清彼此间继承关系及演变过程，推翻长泽规矩也、大塚秀高、欧阳健等先生“《两汉开国中兴志传》较余氏克勤斋《全汉志传》为详”的传统看法」と紹介していたことは既述した。しからば，繆は筆者の説の出所を確認しているはずである。しかし，繆文に筆者の名がでてくるのはここのみで，注にも触れるところがなかった。それにそもそも筆者には自身の書いたもので長澤説に与した覚えはないのである。著名な書誌学者である長澤と並べて批判されるのは光栄ではあるが，身に覚えのないことなのである。繆小雲はいったい何を見たのか。

最初は以下のように考えてみた。繆文の注⑪に引かれる『中国古代小説総目（白話巻）』の「全漢志伝」（と「両漢開国中興伝誌」）の項目によったのではないか。「全漢志伝」（と「両漢開国中興伝誌」）の項目執筆したのは筆者だからである[23]。日本なら百科事典の項目を論文に引けば顰蹙を買うだろう。そのうえ項目執筆者の名も挙げず，注⑯など主編者の名を挙げている。しかも，注は⑯まであるのに，本文には注の番号の⑬と⑮がみあたらない。⑪⑫⑭はあるが注の内容と対応しない。たとえば，注⑪で「《全漢志伝》条，第 279 頁」と

---

[21] 人民文学出版社，2006 年。本書に収められる際，当初の研討会発表論文にあった副題が削除されるなどしている。

[22] 『中国典籍与文化』1，北京図書館出版社，2007 年。ただし，この公開講座の行われた正確な時期は明らかでない。

[23] 程毅中が「従《前漢書平話》到《東西漢演義》——略論明代通俗小説発展的累積過程」を発表した「小説文献与小説史国際研討会」は，この『中国古代小説総目』（文言巻、白話巻、索引巻，全三冊）の出版記念を兼ね，山西教育出版社がスポンサーとなって開催されたものであった。なお，筆者の執筆したのは開闢衍繹通俗志伝、列国前編十二朝、盤古至唐虞伝、有夏誌伝、有商誌伝、両漢開国中興伝志、全漢志伝、古今小説、喩世明言、警世通言、醒世恒言の十一項目であった。

記される筆者の「全漢志伝」の項目も，本文には引用されていない。初稿から何かの都合で本文の一部を削除した際，対応する注の削除及び新たな注番号の付与を怠ったのではなかったか，と。しかし，それでもおかしい。筆者は「全漢志伝」、「両漢開国中興伝誌」いずれの項目においても，長澤説に言及すらしていないからである[24]。

ひるがえって，李宜涯の「元明建陽両漢講史小説比較」はインターネットに公開されており，全文ダウンロードもできる。繆小雲はこれを見つけ，自身の金科玉条にしたに相違ない。そこでその「引言」を見てみると，「仍多遵循孫楷第引長澤規矩也之說，認爲《兩漢開國中興傳誌》較熊大木撰《全漢志傳》爲詳；及大塚秀高所述《兩漢開國中興傳誌》係由熊大木撰《全漢志傳》增補而成」なる文言が見つかった。のみならず，その典拠として筆者の『増補中国小説書目』[25]が挙げられていた。だが，『増補中国小説書目』で筆者は『両漢開国中興伝誌』が蓬左本『全漢志伝』を増補して成ったとはいっていない。これは李宜涯の誤読にもとづく。そこで筆者は【　】[26]により三つの先行業績を紹介した。孫楷第の引く長澤説、『名古屋市蓬左文庫善本解題図録第二集』に見える説[27]、橋本堯説がそれである。李宜涯は『名古屋市蓬左文庫善本解題図録第二集』の説を筆者の説とみなし，橋本説は無視したらしい[28]。繆小雲は堂々と李宜涯を引き写したが，李宜涯も先行研究を恣に無視、誤読して憚らなかったよ

---

[24] 念のため，以下に両項目の関連部分を引用しておく。前者では『全漢志伝』に故事（物語）小説ではなく演義小説の要素が多いことを指摘し，後者では王古魯（省略）と橋本堯説を紹介した後，「按」として，この二作品の成立に関わる注 12 の論文で述べた自説を略記した。

全汉志传：……继承《全相平话》和《两汉开国中兴传志》而成书的平话系统两汉故事小说。此书比《两汉开国中兴传志》较多演义小说因素。

两汉开国中兴传志：……王古鲁云……日本桥本尧……结论如下：刊行时期上看，清白堂本《全汉志传》比《两汉开国中兴传志》早，但从内容上看却相反，《两汉开国中兴传志》比《全汉志传》保存古态者较多，而两者均为《全相平话前汉书续集》之后裔。按：杨氏清白堂刊熊大木编《全汉志传》，嘉靖年间已成书的可能性比较大(参见《全汉志传》条)，那么，《两汉开国中兴传志》所反映者应是嘉靖以前的平话系统两汉故事，西汉卷三项羽自刎于乌江以前部分也有《前汉书平话正集》后裔的可能性，东汉二卷也不失《后汉书平话》后裔的资格。但此论尚有进一步研究的必要。

[25] 汲古書院，1987 年。

[26] 【　】の用法については，「凡例二」で「【　】内は参考文献目録にかかげた文献からの引用である。引用には相互に矛盾するもの，明らかに誤っているものもあるが，これらについてもそのまま引用し，＊で筆者の見解を明らかにしておいた」と明記している。

[27]「二四、全漢志傳　十二巻」（名古屋市蓬左文庫，1980 年）に見える。引用はその「又、両漢開国中興傳誌」の部分から。「凡例」によれば，本書は杉浦豊治、日原利国両氏の分担執筆になるというが，項目ごとの執筆者は明示されていない。それで『増補中国小説書目』には執筆者名を記さなかった。執筆者はおそらく杉浦豊治氏であろう。

[28]『増補中国小説書目』は『中国通俗小説書目改訂稿（初稿）』（汲古書院，1984 年）を増補してなったもので，こちらは台湾で海賊版がでている。この初稿は橋本説を引いていない。李宜涯が見たのは初稿だったかもしれない。

うだ。繆も李も研究者としての資質を疑いたい。ちなみに，筆者が 1989 年に発表した「講史章回小説の出版と改変――『列国志』をめぐって――」では，この件に関し以下のように主張していた。

> 『全漢志伝』の西漢巻一の尾題，巻三の首題は他と異なり京本通俗増演按鑑全漢志伝となっている。「増演」とある以上，もとづくテキストがあり，それをふくらませたに相違ない。そのもとづいたテキストそのままではなくとも，それにかなり近いと思われる版本が現存している。『全漢志伝』に遅れ，万暦三十三年に西清堂詹秀閩[29]より刊行された『両漢開国中興伝誌』がそれである。……その巻三第三十三葉の項羽自刎以降，巻四末の文帝即位までの部分が『全漢志伝』以上に『前漢書続集』に近く，全体により古い様相をとどめる作品と認定される。もちろん古い作品そのものではなく，これに「詠史詩」を付加するなどした作品であって，その点は封面が増補をうたう点と符号する。従って『全漢志伝』と『両漢開国中興伝誌』とは兄弟またはいとこの関係にあたる作品とみておくべきだろう。

李宜涯が筆者の説として引くなら，当然これであった。

三　書誌学的な問題

そもそもいずれも蓬左文庫に蔵される，万暦十六年の余氏克勤斎序を冠する『全漢志伝』にせよ，万暦三十三年の蓮牌木記を有する『両漢開国中興伝誌』にせよ，初印本でないのみならず，初刻本ですらなかった（この点について，詳しくは稿を改めて論じたい）。従って，上記の序や蓮牌木記にしても，初刻本のそれを継承したものか，再刻時以降に新附ないし修改されたものか，慎重に見極める必要がある。案ずるに，営利を目的とする出版物にあっては，上記の年号にしても，現存のテキストの初印，ことによれば再印の時期を示すとみる方が無難である。だから，万暦十六年の序を冠する蓬左本『全漢志伝』が万暦三十三年の蓮牌木記を有する『両漢開国中興伝誌』より早く刊行された可能性は大であるにしても，両者の初刻本の刊行時期がこの年である，あるいは『全漢志伝』が『両漢開国中興伝誌』に先立って刊行されていたと考える必要は必ずしもなく，両者の内容の比較の結果次第では，初刻本の刊行時期さえ小説史的にはさして重要ではなくなる可能性も生ずるのである。この意味でポイントとなってくるのが両者の内容，とりわけ元代の平話との親縁性である。繆小雲とならんで「《全汉志传》与《两汉开国中兴传志》的成书」を『明清小説研究』2007-3 に発表した汪燕崗が，その結論部分で「《两汉志传(ママ)》主要抄袭《全汉》和平话」としたのは，こうした点を考慮せず，両者の刊行年とされる万暦三十三年と十六年に囚われすぎたためであろう[30]。ただし，元代の平話との親縁性についての十全な結論を得るには『全漢志伝』と『両漢開国中興伝誌』の全面的な比較が欠かせず，一読した印象で軽々に論ずる訳にはゆかない。現在

---

[29] 西清堂を原文では鹵清堂に誤っている。慎んで訂正しておく。

[30] 汪燕崗とは 2006 年 8 月にハルビンで開催された第三届中国古代小説国際研討会の折に初めて会い，初稿をもらっている。ただし，この研討会での発表テーマはこれと異なる。

筆者が進めている研究[31]はまさにそのためのものであるが，未完ゆえ検討は将来に期すこととして，以下では両者の版本に関する書誌学的な情報を総括し，その点をめぐるこれまでの研究者の解釈を紹介しておきたい。

『王古魯日本訪書記』の〔十三〕〔附〕全漢志伝は，蓬左本『全漢志伝』の版面の状況とそれに対する自身の解釈を以下のように述べている。少し長いが，その後の議論の要となるものなので，繁を厭わず引用しておこう。

> 此书也藏于日本蓬左文库，明万历十六年刊本。明熊大木撰，扉页已佚，西汉首有万历十六年余氏克勤斋序，首页书名题《京本通俗演义按鉴全汉志传》。另双行题『鳌峰后人熊钟谷编次』『書林文台余世騰梓』。细阅『余世腾』三字系挖补。显系后来书贾所补。西汉共六卷。东汉亦有序，因序尾遗失，无法了解序者名字，目录上半部遗失，依照留存照片看来，亦系六卷。再照现存东汉卷之一首页，书名所题与西汉完全相同，但已无『熊钟谷编次』字样，仅仅单题『爱日堂继葵刘世忠梓行』，此行除『梓行』二字外，字特别小，显系后来挖补，疑此书原为余象斗(书中常称为文台的)所刊行的。

ちなみに，下線分は王古魯が写真撮影に失敗したことによるものであって，蓬左本『全漢志伝』の東漢巻首にも西漢と同様万暦十六年余氏克勤齋の序が冠され，目録も備わっている。また，東漢末に「清白堂楊氏梓行」の文字の書かれた蓮牌木記を抱え持つ人物の挿絵が附されていることの指摘を欠く。おそらく撮影に遺漏があったのであろう。王古魯は写真撮影を優先し，その場で記録はとらなかったようだ。

程毅中の「明代小説的盗版与偽托」は，おそらく影印本により王古魯の指摘漏れを補い修正したうえで，当時の出版状況を踏まえつつ，この問題に次のような解釈を下した。

> 《全汉志传》……现在我们见到的有清白堂杨氏刻本……就是熊大木编的，但是书上又刻书林余文台余世腾梓行。这也可能的，编的是一个人，出版的又是一个人，编者是熊大木，出版的是姓余的。但是也很可疑，因为余世腾就是余象斗的一个化名。这回他没有把熊钟谷的名字抹掉，比较老实的，但是西汉部分的第一页上“文台余世腾”五个字略小，像是挖改的。后面东汉部分又署名爱日堂刘世忠梓行，前后不一样，这种情况很可能这个余世腾(也就是余象斗)刻了这个版，印了几版以后，又卖给那个姓刘的——刘世忠，而刘世忠在后面又挖改了。他为了省事，在第一页上挖了一个刻印的名字，在其他各卷还保留了余世腾的名字。这种书商就是为了赚钱，不注意名声，不像余象斗既要利又要名。……
>
> 当时通俗小说的读者比较多，为了适应读者的需要，出版商都来出这部书。但是从实际情况来看，《全汉志传》也不是熊大木一个人编的。可能在熊大木之前就有一部《两汉开国中兴传志》的历史演义。这部书和熊大木的《全汉志传》详略不同，但是内容有很多重复的地方，而相同的地方又

---

[31]「前漢書平話続集・全漢志伝・両漢開国中興伝誌輯校本（試行本）並びに研究」（『埼玉大学大学院文化科学研究科博士後期課程紀要 日本アジア研究』4，2007年）ならびに本稿がそれ。いずれも平成18年度埼玉大学プロジェクト研究「前漢書平話前集・後集の復元」ならびに，平成19・20年度科学研究費補助金「前漢書平話前集・後集の復元を通して見た全相平話」の成果の一部である。

来源于更早的元朝人的平话。元朝人刻的全相平话……保留下来的《前汉书平话》只有一个续集，而这一部分现在都被这两种书(《两汉开国中兴传志》和《全汉志传》)吸收，改编了。

この考え方，とりわけ前半部のそれによれば，蓬左本『全漢志伝』出版までには以下のごとき経緯があったことになろう。熊大木が元人の全相平話にもとづき編次したものを余世騰すなわち余象斗が出版した（その時期は，程毅中の論理によれば万暦十六年ということになる）。後日その版木を余象斗から入手した劉世忠は，手っ取り早くその一部のみ埋木改刻して出版した。それが現存の蓬左本である，と。この考え方によれば，熊大木の作品は余氏により初めて出版されたことになろう。ただし，「姓余」と余世騰の関係についてはあいまいといわざるをえない。

これ以前に，これと異なる説を唱えたのが井上進[32]である。この間の事情を井上は以下のように述べる。

この本は一般に万暦十六年刊本とされているが，とても従いがたい。いわゆる「万暦十六年」とは，巻端の余氏克勤齋序の紀年によるものだが，この序文は内容及び版刻からして，更に序文の後にある目録も版刻から見て後補であり，毎巻首葉の「書林文台余世騰梓行」「余氏克勤齋梓」等の文字も剜改である。清白堂の名，また版刻の，とりわけ毎葉上図の古拙な風気は，どれも万暦中のものとは考えられず，おそらく嘉靖後半年の刊本であろう。すなわちこれは嘉靖中楊氏清白堂刊万暦後修本，というのが私の考えであり，本文の叙述はこれによっている。

井上は日本に数少ない書籍文化の専家で専著[33]もあり，その経験に培われた独自の鑑定眼にもとづく発言は無視できないものがあるが，後補とされる序文及び目録の「版刻」，万暦中のものとは考えられないとする「上図の古拙な風気」については，もう少し説明が欲しいところである。また，「嘉靖中楊氏清白堂刊万暦後修本」といえば，楊氏原刊本も上図下文本だったことになるのだが，その点に問題はないのか気にかかる。首葉の文字の剜改も「毎巻」ではないようである[34]。

四　元人の平話から『両漢開国中興伝誌』、『全漢志伝』へ

楊氏清白堂（と清江堂）に関わる点については稿を改めて論ぜざるをえないが，蓬左本『全漢志伝』に対する余世騰の関与については，現状でももう少し立ち入って論ずることが可能である。以下では汪燕崗の「《全汉志传》与《两汉开国中兴传志》的成书」を紹介しつつ，その点につき論じてみたい。

表Ⅰは，蓬左本『全漢志伝』、『両漢開国中興伝誌』と『前漢書平話続集』の関係を筆者において表としたものである。これと同様の表をもとに，汪燕崗は以下のような結論を下している。

---

[32]「明末清初の出版と出版統制（前編）」，『東アジア出版文化研究 こはく』，文部科学省科学研究費特定領域研究，2004年。

[33] 井上進には『中国出版文化史——書物世界と知の風景』（名古屋大学出版会，2002年）、『書林の眺望——伝統中国の書物世界』（平凡社，2006年）、『三重県公蔵漢籍目録』（三重県図書館協会，1996年）などがある。

[34] こうした点については筆者の注12の論文を参照されたい。

表Ⅰ　全漢志伝・両漢開国中興伝誌対照表１

全漢志伝		両漢開国中興伝誌	
1 2	西漢上	両漢一(1-3a)	
3 4a	西漢中	両漢二(3b-4)	前漢書平話続集
4b 5 6	西漢下		
1 2	東漢上	両漢三(5-6)	
3 4 5 6	東漢下		

由以上的分析可知，《全汉志传》并非成书于一时一人之手，《西汉上》当为熊大木所作，后经增改；《西汉中》为两人所作，前一部分，某人虽然参照了《前汉书续集》，但主要是据史书增补而成；后一部分则是某人直接抄《前汉书续集》。《东汉上》当据已佚的平话而成，而《东汉下》和《西汉下》则据史而成。

从《西汉中》抄袭《前汉书续集》之程度不等，作者非一的混乱情况来看，这部分内容恐非自熊大木之手，而是万历间余象斗刻《全汉志传》时，为了追求情节之“全”而增补的，《西汉下》和《东汉志传》当也如此。……

汪燕崗にせよ繆小雲にせよ，中国の研究者の関心は元人平話から『両漢開国中興伝誌』、『全漢志伝』をへて『東西漢演義』にいたる，漢代を対象とする歴史物語、歴史小説の変遷の後半部分にあって，前半部分にはない。これに対し，王古魯ならびに日本の研究者の関心はその前半にあった。しかも，汪燕崗は『両漢開国中興伝誌』の木記や蓬左本『全漢志伝』の序の紀年をそのまま両者の成立時期とみた。したがって，先の変遷の過程については『前漢書平話続集』→『全漢志伝』→『両漢開国中興伝誌』→『東西漢演義』の順しか念頭になかったに相違ない。ちなみに，汪燕崗によれば，現存の『西漢志伝』すなわち蓬左本『全漢志伝』の西漢部分は，熊大木の清江堂（清白堂ではない）本『西漢志伝』を基礎に増修し，万暦十六年に重刊された余象斗の最も早期の刻本となる（余象斗が双峰堂や三台館を名乗り始めるのは万暦十九年以降だったからである)。『東漢志伝』については，余象斗が刊行したものであるが，楊氏清白堂と劉世忠愛日堂がその版木を入手したのち，愛日堂は埋木改刻により，清白堂は木記を付加することによりその名を残したものとする。

しかし，蓬左本『全漢志伝』各巻巻頭の三行（ないし二行。ただし巻数表示を除く）には一定の傾向が見られる。先の表を増補した表Ⅱを見られたい。なお，埋木改刻と思われる文字には下線を施しておいた。

表Ⅱ　全漢志伝・両漢開国中興伝誌対照表２

全漢		首	尾	両漢	元人平話
1	西漢上	京本通俗演義按鑑全漢志伝　西漢 鰲峰後人熊鍾谷編次 書林文台余世騰梓行	京本通俗増演按鑑全漢志伝西漢	両漢一 (1-3a)	前漢書平話前集
2		京本通俗演義按鑑全漢志伝　西漢 勤斎文台余世騰梓行	新刊京板通俗演義按鑑全漢志伝		前漢書平話後集
3	西漢中	京本通俗増演按鑑全漢志伝 余氏克勤斎梓	新刊京本通俗演義按鑑全漢志伝	両漢二 (3b-4)	前漢書平話続集
4a 4b		刻京本通俗演義按鑑全漢志伝 克勤斎文台余世騰刊行	×		
5	西漢下	新刊京本通俗演義按鑑全漢志伝　前集 余氏克勤斎校正刊行	新刊京本通俗演義按鑑全漢志伝		
6		新刊京本通俗演義按鑑全漢志伝　前集 克勤斎文台余世騰刊行	按鑑全漢志伝		
1	東漢上	京本通俗演義按鑑全漢志伝　東漢 爰日堂継葵刘世忠梓行	×	両漢三 (5-6)	後漢書平話前集
2		京本通俗演義按鑑全漢志伝　東漢 克勤斎文台余世騰梓行	×		後漢書平話後集
3	東漢下	新刊京本通俗演義按鑑全漢志伝　後集 余氏克勤斎校正刊行	×		
4		新刊京本按鑑通俗演義全漢志伝　後集 余氏克勤斎校正刊行	×		
5		新刊京本按鑑通俗演義全漢志伝　後集 余氏克勤斎校正刊行	×		
6		新刊京本按鑑通俗演義全漢志伝　後集 余氏克勤斎校正刊行	新刊京本通俗按鑑演義全漢志伝		

埋木改刻か否かの判断は，のどの部分が見難いコピーによるものであるため判断がわかれる可能性，具体的にはもう少し増える可能性があること（ただし「東漢下」部分の「余氏克勤斎校正刊行」にその可能性はない），尾題は文字の大きさやその位置から明らかに後補のものがあるがここではそれに言及しないこと，個々の版木には補刻のものが少なからず混じっていることなどを初めに断った上で，この表により蓬左本『全漢志伝』成長の軌跡を推定したい。

『全漢志伝』は，蓬左本にいたるまでに少なくとも四期ないしは五期に亙る成長のステージをへているとおぼしい。

第一ステージは，「京本通俗演義按鑑全漢志伝」を名乗っていた時期で，すでに西漢と東漢からなっていた。蓬左本『全漢志伝』の前漢巻一から巻四前半までと後漢の巻一、二に相当する部分の原本がそれで，京本を銘打つから，遡れば熊鍾谷大木の編次のテキストにゆきつくとみられるが，ここでいう原本はその福建での翻刻原本（上図下文本）で，熊鍾谷原編本に加えられた上図はそ

の当時なお福建の書肆に伝えられていた全相平話ないしはその子孫の上図に由来するとみてよかろう[35]。この原本における全漢の意味あいは，前漢も後漢もはいっているくらいのものだったとおぼしい。巻数は，全相平話が各集三巻からなることからみて三巻もしくは九巻だったと推定される。

第二ステージは，これに増演すなわち増補が加えられた時期である。増演の文字は巻一の尾題と巻三の首題に見られるが，『両漢開国中興伝誌』との比較の結果からみて[36]，前後の入れ替えはあっても巻一部分に増演はほとんどなく，巻二などむしろ削除されたと思われる部分が目立つことからみて，『前漢書平話』前集相当部分はほぼそのまま，後集相当部分は大幅に簡略化され，あわせて蓬左本『全漢志伝』の巻一、二となったと推定される[37]。これに対し，続集相当部分には増演が大幅に施されたため，巻三一巻に収めるのが困難になってしまった。そこで，あるいは『前漢書平話』続集最後の部分の不自然な終わり方を改善するため，後続部分を書き足し（続集に続く別集ももとは存在していた可能性はあるが，この時点では伝を失していたと考えられる），あわせて巻四としたうえ，書き足し部分を含むことを明示するため，巻首題を少し変え，「刻京本通俗演義按鑑全漢志伝」として出版することにした。ただし，現時点ではその実行者が誰だったかは不明である。

第三ステージは，熊鍾谷の原編にはなかった（元人の平話になかった，あるいは残されていなかった）前漢の開国関連以外の部分，すなわち蓬左本『全漢志伝』の巻五、六相当部分を書き足した時期で，「新刊京本通俗演義按鑑全漢志伝」と「新刊」の二文字を書名に附し，当初はそれ以前の部分とは別に（おそらく巻数は通巻にして）売られたとおぼしい。この実行者も明らかではない。

第四ステージは，同じく原編にはなかった後漢の中興以外の部分を書き足した時期で，前漢部分と同様書名に「新刊」の二文字を附し，後集として，当初はやはりそれ以前の部分とは別に（同様通巻で）売られたとおぼしい。この実行者は間違いなく克勤齋である。

このあとに，以上の第二、第三、第四ステージで刊行された三つの版木を集め，その刊行者にかかわる部分をすべて埋木で改刻し（あわせて第四ステージで出版した部分に前集の文字を加え）一括出版した第五のステージが考えられるが，この時期は第四のステージと同時とみてもさしつかえはない。上記のステージに対応するそれぞれの巻の上図にこれといった相違は見られないし，蓬左本『全漢志伝』前漢六巻後漢六巻には一貫した刊行物である証拠もあるから[38]，第二ステージ以降は短期間あるいは同時に実行された可能性が高い。そして，その企画をプロモートした人物が文台余世騰だったのであろう。愛日堂継

---

[35] 注 5 の小松論文に，『全漢志伝』の上図に蝴蝶装の上図に由来すると推定されるものが存在することが指摘されている。

[36] 注 31 の拙論ならびに今後発表予定の科学研究費補助金の報告書冊子を見られたい。

[37] 注 12 の拙論では巻一、二部分の増演を想定した議論をしたが，当時は『前漢書平話』正集の存在を想定しており，蓬左本『全漢志伝』と『両漢開国中興伝誌』との対照も不十分だったためで，前後二集の存在を想定し，対照もなった現在はこのように考えている。

[38] 『全漢志伝』を製本するにあたっては，印面 20 数葉からなる 20 束を 10 束ずつ合綴して 2 冊としたとおぼしく，その痕跡が 20 数葉ごとの上図表中央の数字として残っている。ただし，これが印刷したものか否かは不明である。

葵劉世忠、清白堂の関与はその後かと思われるがはっきりしない。この間の状況についてはとりあえず待攷としておきたい。

五　結論にかえて

『両漢開国中興伝誌』についても複数のステージの存在が想定されるが，その経緯は『全漢志伝』のそれほど複雑ではなかったはずである。両者の比較によれば，『全漢志伝』とはまったく別に，元人平話の不分明な箇所をわかりやすく書き換えるなどした，結果的にこれよりやや長めの『両漢開国中興伝誌』が編まれ，『前漢書平話』の前集、後集相当分を二巻半，続集相当分を一巻半として出版されたとみなせる（現存本は初印本でも初刻本でもないと思われるから）。それは，当時まだ存在していた『前漢書平話』前後続集と『後漢書平話』前後集（上表の「東漢上」部分を仮に二集分とみた），またはその子孫に依拠したものであったろう。時期は，熊鍾谷以前だった可能性も否定できないがおそらくそれ以後で，実行候補者としては唯一黄化宇が知られるのみである。ちなみに，熊鍾谷が『両漢開国中興伝誌』を参照した明確な証拠はない。『両漢開国中興伝誌』の上図は元人平話ないしはその子孫のそれを参照しつつ，新たに刻されたものであろう。

その後『全漢志伝』は増補に継ぐ増補，改訂に継ぐ改訂をへて，万暦十六年までにはほぼ現在の姿となった（「爰日堂継葵刘世忠」の埋木改刻と「清白堂楊氏梓行」の蓮牌木記の付加を除く）。『両漢開国中興伝誌』は，『三国志演義』の刊行ラッシュをへて読者の志向が平話から演義に向かったため長らく忘れられていたが，万暦三十三年にいたって再刊された。その初印本に近いテキストが蓬左文庫所蔵の『両漢開国中興伝誌』ではなかろうか。

以上に述べたところは，『全漢志伝』の首題をほとんどその唯一の拠所とした，いわば推測に近いものであり，なおかつ蓬左本『全漢志伝』や『両漢開国中興伝誌』が初刻本でないとする根拠についても別稿に譲ったものであるから，おそらく結論とはいいがたいものである。結論にかえてとしたゆえんである。読者は是非注 31 で触れた，今後発表予定の科学研究費補助金の報告書冊子を見られたい。

補記

今回は，本来前稿「前漢書平話続集・全漢志伝・両漢開国中興伝誌輯校本（試行本）並びに研究」に続き，『前漢書平話続集』巻中、下部分の輯校本を発表する予定で，原稿もほとんど完成していたが，上野隆三、氏岡真士両氏よりその労作である「『漢書故事大全』校訂稿」（ならびに注 5 の氏岡論文）を収める科学研究費の報告書を贈られたことにより，『漢書故事大全』、『両漢開国中興伝誌』、『全漢志伝』三者の備わる部分のうち，『両漢開国中興伝誌』巻五に対応する部分の輯校本を作成し，これに替えることにした。本来比較分析の結果とあわせて公表すべきものであるが，すでに完成している巻六部分の輯校本とともに次稿または上記の報告書に機会を譲ることにした。なお，『漢書故事大全』はもっぱら先の「校訂稿」によっているため，原書と文字使いが異なる（2007 年 8 月に武夷山で開催された「2007 明代文学与文化国際学術研討会暨中国明代文学学会(籌)第五届年会」の際に一見した複写による）。修正については今後の課題としたい。また入力の誤りがあればそれは筆者の責任である。最後に再度上野、氏岡両氏に感謝の意を表する。

なお，本稿は平成 19・20 年度科学研究費補助金「前漢書平話前集・後集の復元を通して見た全相平話」の成果の一部である。

全漢志傳、兩漢開國中興傳誌、漢書故事輯校本(試行本)并研究緒論

大塚　秀高

以下所揭示之輯校本（試行本）爲《全漢志傳》、《漢書故事》中，與《兩漢開國中興傳誌》卷五內容相應部分之三書之對照比較。此乃仿照前稿「前漢書平話續集、全漢志傳、兩漢開國中興傳誌輯校本（試行本）及其研究」模式，並附上簡單的研究緒論，說明至目前爲止的研究歷程。此次未附凡例，在於本稿完全仿照前稿模式。此次本欲承襲前稿，發表《前漢書平話續集》卷中、卷下，及《全漢志傳》、《兩漢開國中興傳誌》中與之相應部分，此三者之輯校本，原稿亦以完成，然因發現《漢書故事》此新資料，並欲進行與此相關之研究，故將其替換。其比較之結果將再另行發表。從目前的研究結果可推測《漢書故事》是在《全漢志傳》、《兩漢開國中興傳誌》刊行之後，將此兩者加以折衷完成之作。

關鍵詞：《全漢志傳》、《兩漢開國中興傳誌》、《漢書故事》、輯校本